

ランドセルがつくる未来

千葉市立打瀬中学校 二年 白石 晴子

日本では、義務教育を受けることができ、小学校と中学校には、みんな通うことができる。そのため、子供が学校に通うのは当たり前だと私は考えていた。

しかし、ある時母の何気ない言葉で、学校に通って学べることは当たり前ではないと気付いた。「ねえ。ランドセルを必要としている子に使ってもらおうよ。はるちゃんよりも、必要としている子がいるから、寄付しよ。」と言われたのだ。私は、その時初めて学校に通えない子供について知った。私には、大きな衝撃だった。小学校卒業後。私は、使わなくなったランドセルをアフガニスタンの子供に寄付した。ランドセルを持っていない彼らに寄付することには、どんな意味があるのか。初めは、良く分からなかったが、調べると今の日本では考えられないことが、記事に載っていた。「男女平等に学べるようにする」ためだという。どういうことなのだろう。私はよく理解できなかった。

アフガニスタンでは、昔女子教育が認められていなかった。現在もそうだ。二〇二二年十二月二十日、アフガニスタンの全国の公立・私立大学で女子が教育を受けられなくなり、女子の中学・高校も出校停止。小学校までしか、教育を受けられなくなったのだ。通いたくても通えない状況である。学校に自由に行けない、学べない辛さ。女性は家の中で、外に出る時は、なるべく肌を見せてはいけないという中で生きる人達。そこで、男女平等にランドセルを送り、みんなが学べる環境を整えることを第一と考え、始まったのがこの運動。それを見た私は、小学校生活六年間を共にしたランドセルを、喜んでアフガニスタンへと送った。送ったランドセルには、私の夢が一杯つまっている。「歌手になりたい。」

「テニス選手になりたい。」という夢。辛かったことや楽しかったこと等、私の思い出もぎっしり詰まっている。自分と同じくらいの女の子が、学校に通わせてもらえてないという悲しい現実。私は、言葉では表せないほどの衝撃を受けた。

そして、学校に通えない子供達について、調べてみた。何と、学校に通えない子供は、世界に2億4400万人もいると分かった。

「家が貧しく、子供のうちから働かなければいけない。」

「戦争が起こった。」

「知識のある教師がいない。」

等があった。また、戦争による影響で学ぶことだけでなく、大人になることさえ出来ずに亡くなってしまう子供もいるのだ。とても悲しく信じがたい現実である。

私は、このことから学校に通い学ぶことが出来るのは、当たり前ではなく有難いことで大切にすべきだと考えるようになった。中学生になってからは、難しい内容を勉強するようになり、テストも増え、勉強が嫌だと感じることも多くなった。「もう勉強なんてしたくない!」と放り出して逃げたくなる時もある。「なぜ、勉強するのか。別にしなくてもいいのではないか。」と考えてしまうことも少なくない。しかし、そんな時私の頭の中に浮かぶのは、寂しそうな目でこちらを見ているアフガニスタンの子供達の写真だ。私は、学ぶことが出来るのだから、学ぶことを楽しまねばと、努力を惜しまないようにしている。

学校に通うことで得る学びは、教科書からだけではないと私は思う。私は、学校生活の中での様々な経験を通して、日々多くの学びを得ている。例えば、友達との会話から人の心を理解したり、部活動を通して自分の好きなことを更に伸ばしたり、生徒会活動を通して、自分達で考え行動する自治を学んだりと、これからの社会に役立つことを体験し、学んでいる。今しか出来ないことが、出来ないのは悲しすぎる。

私と同年でも、学校に行けない人々は私のような経験をせずに、人生を歩んで行く。ランドセルの重みも分からず、友達との会話で共感したり、怒ったりすることも出来ないだなんて、悲しすぎる。

私のランドセルは、今誰が使ってくれているのだろう。私の思い出と夢が沢山詰まったランドセルを背負い、ぜひ学ぶことの楽しさを体験してもらいたいと思っている。私の行ったランドセル寄付は、小さな小さなボランティアかもしれない。でも、受け取ってくれる子供が幸せな気持ちになり、夢ふくらむ日々を送ってくれたら嬉しい。私のランドセルを受け取ってくれた子は、どんな未来を歩んで行くのだろう。いつか、出来たらその子と出会い、お互いの人生を語り合ってみたいと思う。

六年間一緒に登校したランドセル。手放してしまうのは、少し悲しく勇気が必要だった。
私の大切なランドセルが誰かの未来を灯す希望になることを願っている。